

第13回東京女子医科大学血栓止血研究会

日 時 平成6年3月4日(金) 6:00~8:00pm
場 所 第一臨床講堂

当番世話人挨拶

(循環器内科) 細田 瑛一

一般演題

座長 (国立横浜病院循環器科) 青崎正彦

1. 拡張型心筋症 (DCM) における血栓塞栓症の臨床的検討

(循環器内科) 野田水奈子・岩出和徳・山下倫生・青崎正彦・

大森久子・薄井秀美・堀江俊伸・細田 瑛一

(同 研究部) 大木勝義

2. 特発性血小板減少性紫斑病症例における抗リン脂質抗体陽性の臨床的意義

(血液内科) 青山 雅・小林祥子・寺村正尚・山田 修・

増田道彦・泉二登志子・押味和夫・溝口秀昭

3. 無症候性脳梗塞における血小板機能と血管病変

(神経内科) 内山真一郎・原由紀子・丸山勝一

(脳神経外科) 高倉公朋・井沢正博

(青山病院) 木全心一

(戸田中央総合病院) 田中邦夫

4. 妊娠中母体血中線溶系酵素の動態とその意義

(産婦人科) 佐倉まり・安藤一人・高 眉揚・中林正雄・武田佳彦

座長 (循環器内科) 細田 瑛一

特別講演

線溶系反応の制御機構

(自治医科大学血液医学研究部門止血血栓助教授) 坂田洋一

1. 拡張型心筋症 (DCM) における血栓塞栓症の臨床的検討

(循環器内科, *基礎循環器科)

野田水奈子・岩出和徳・山下倫生・

青崎正彦・大森久子・薄井秀美・

堀江俊伸・細田 瑛一・大木勝義*

〔目的〕 DCM では、血栓塞栓症 (TE) の合併頻度が高いとされるが、その病態の臨床的検討成績は少ない。今回、TE の臨床像を中心に検討を行った。

〔対象および方法〕 対象は、当院において心臓カテテル検査および心筋生検により DCM と診断した109例 (男89例, 女20例, 平均年齢: 49.9歳)。TE の発症頻度, 病態 (心房細動, 心不全の有無, 抗血栓薬の使用状況など) を retrospective に検討した。

〔結果〕 109例中, 75例が生存, 死亡が34例 (剖検例18例) であった。臨床的に109例中24例 (22%) 37回にTE が合併し, 部位は, 脳17例 (TE 24例中71%) 25回, 肺6例 (25%) 7回, 末梢血管3例 (13%) 4回, 腎

1例 (4%) 1回に認められた。TE 発症時, 心房細動は13例に認められ, 洞調律は11例であった。発症時 NYHA I 度: 2例 2回, II 度: 12例 16回, III 度: 11例 15回, IV 度: 4例 4回であった。剖検18例中, 心腔内血栓は13例 (72%) 20心腔 (左室11例, 右室4例, 左房2例, 右房3例) に認められた。TE は11例 (61%) 22回 (脳3例 3回, 腎8例 8回, 肺6例 6回, 脾4例 4回, 末梢血管1例 1回) に認められた。

〔考察〕 DCM は, 臨床上天また病理学的にも TE の合併が多く, 抗血栓療法の適応例が多いことが推測された。

2. 特発性血小板減少性紫斑病症例における抗リン脂質抗体陽性の臨床的意義

(血液内科)

青山 雅・小林祥子・寺村正尚・

山田 修・増田道彦・泉二登志子・

押味和夫・溝口秀昭

最近、血栓症、習慣性流産、血小板減少を特徴とする抗リン脂質抗体症候群 (APS) が注目されている。抗リン脂質抗体の種類としては、梅毒反応(ワ氏)ループスアンチコアグラント (LA)、抗カルジオリピン抗体 (抗 CL 抗体) が知られている。全身性ループスエリエマトーデス (SLE) において抗リン脂質抗体が高率に陽性であることが知られているが、血液疾患では、特発性血小板減少性紫斑病 (ITP)、血栓性血小板減少性紫斑病 (TTP) などがある。ITP では臨床症状として出血が主である。

今回、ITP の症例で抗リン脂質抗体陽性の患者を経験した。APS においては抗 CL 抗体のなかでも抗 CL・ β_2 GP1 抗体が特異的に陽性とされている。ITP 症例において、これらの抗リン脂質抗体、特に、抗 CL・ β_2 GP1 抗体を検索しその臨床像と抗体の意義を明らかにすることを目的とした。

ITP で抗リン脂質抗体陽性の患者は 3 例であった。3 例とも出血症状を主訴としていた。血小板数は $0.2\sim 0.5\times 10^4/\text{mm}^3$ 、APTT は 35.1~37.4 秒であった。抗リン脂質抗体としては、1 例に梅毒反応生物学的偽陽性、全例で LA 陽性、2 例で抗 CL 抗体 IgG 陽性、1 例で抗 CL 抗体 IgM 陽性、抗 CL・ β_2 GP1 抗体は 1 例で陰性、2 例で検索中である。患者によって陽性の抗リン脂質抗体の種類は異なっており、また APTT の延長もさまざまである。SLE が基礎疾患で典型的な APS の合併の認められた 1 例では梅毒反応生物学的偽陽性、LA 陽性、抗 CL 抗体、IgG 陽性、IgM 抗体陰性、抗 CL・ β_2 GP1 抗体強陽性であった。

ITP は血小板減少を主体にする疾患であり、他の疾患を除外する必要がある。ITP に単に抗リン脂質抗体が陽性であるのか、ITP と診断された症例のなかに APS が混在しているかは興味深く今後、症例を集めて検討したい。

3. 無症候性脳梗塞における血小板機能と血管病変

(東京女子医科大学脳神経センター神経内科¹⁾, 脳神経外科²⁾, 同 青山病院³⁾, 戸田中央総合病院⁴⁾)

内山真一郎¹⁾・原由紀子¹⁾・丸山勝一¹⁾・高倉公朋²⁾・井沢正博²⁾・木全心一³⁾・田中邦夫⁴⁾

〔目的〕大血管の粥状硬化巣に形成された血小板血栓に起因するアテローマ血栓性脳梗塞や TIA は血小板依存性疾患病態であり、抗血小板療法の適応がある

と考えられているが、無症候性脳梗塞における血小板の関与については不明である。そこで、今回我々は脳ドックで無症候性脳梗塞 (SI) が発見された症例について大血管病変 (LVD) と血小板活性化所見の有無を検討した。

〔方法〕脳ドックで SI が発見された連続 59 症例 (男性 39 例, 女性 20 例, 年齢 43~81 歳, 平均 63 歳) について危険因子 (高血圧・糖尿病・高脂血症・喫煙), LVD, 血小板活性化所見の有無を検討した。LVD は、脳血管撮影・MRA・頸部超音波ドプラーでの頭蓋外または頭蓋内大血管の狭窄性プラークまたは閉塞, 頸部血管雑音, 大動脈弓または内頸動脈サイフォン部の石灰化, 心電図での虚血性心疾患のうち少なくとも一つを認める場合と定義した。血小板活性化は血小板不可逆凝集を生じる閾値濃度が ADP で $1\mu\text{M}$ 以下, アラキドン酸 (AA) で 0.28mM 以下, 血漿中の β -thromboglobulin (βTG) が 50ng/ml 以上, 血小板第 4 因子 (PF4) が 20ng/ml 以上と定義した。

〔成績〕LVD は 23 例 (39%) に認められた。高血圧・糖尿病・高脂血症・喫煙は LVD (+) 群では各々 39%, 39%, 35%, 22%, (-) 群では各々 28%, 14%, 14%, 17% であり, (+) 群で糖尿病と高脂血症が高率であった ($p < 0.005$)。血小板凝集能は, LVD (+) 群では ADP 凝集亢進 30%, AA 凝集亢進 43%, (-) 群では各々 11%, 11% であり, (+) 群で AA 凝集亢進例が高率であった ($p < 0.01$)。血小板放出因子は, LVD (+) 群では βTG 増加 38%, PF4 増加 31%, (-) 群では各々 5%, 5% であり, (+) 群で βTG 増加例が高率であった ($p < 0.05$)。

〔結論〕SI のうち LVD を有する例では糖尿病と高脂血症の合併頻度が高く, 血小板活性化所見を認めやすいことから, アテローマ血栓性脳梗塞症の予備群として抗血小板療法の適応があると考えられた。

4. 妊娠中母体血中線溶系酵素の動態とその意義

(産婦人科)

佐倉まり・安藤一人・高 眉揚・中林正雄・武田佳彦

〔目的〕我々は胎盤局所における線溶系酵素と fetal fibronectin (fFN) が胎盤形成の重要な指標になることを報告してきたが、今回正常妊娠経過の母体血中でのこれら指標の動態を明らかにするとともにその意義を検討した。

〔方法〕外来で妊娠初期, 20 週, 30 週, 満期の 4 期